

私にも
言わせて!
第104回

みんなの健康をみんなで守ることを
目指す「中核市やお」に就いて



八尾市健康福祉部保健予防課
課長補佐(兼)保健企画課(医師)

羽山 実奈

平成19年高知大学医学部医学科卒業。初期研修後、内科医、産業医として勤務し、大阪大学大学院に進み、公衆衛生学教室にて28年博士課程修了。25年大阪がん循環器病予防センター循環器病予防部門を経て、30年大阪府八尾市入庁。31年4月より現職。

行政医師として3年1か月がたちました。この間、半年ほど産休・育児を取得しました。知識・経験はまだですが、上司・同僚に恵まれて、充実した2年半を送りました。自分の役割を模索する日々です。このような執筆の機会を頂きましたので、これまでの道を振り返ってみました。個人的な話になりますが、公衆衛生の道に進むかどうか悩んでいる若手医師の皆さまの参考になれば幸いです。

大阪府第4波の中で

現在(令和3年5月)、大阪府における新型コロナウイルス感染症(COVID-19)第4波の中で、八尾市も週の感染者数が人口10万人当たり最多95・7人(第17週)、1日の感染者数最多61人(5月10日)、酸素投与を要する酸素飽和度93%以下の患者がただちに入院できない、まさに非常事態の患者対応に緊張する毎日を経験しています。全世界規模で拡大したこの新興感染症に保健所に身を置いて対峙することになろうとは思ってもいませんでした。

医学部時代の原点

剣道部に所属しながら、フィロソフィ医学研究会にも所属していました。医学的な活動を早く始めたいという単純な動機からでした。この会では、当時の老年病科(循環器病学・神経内科学)の指導の下、毎夏、高知県香北町(現・香美市)の高齢者健診に参加していました。神経行動機能検査等は学生が行い、香北町研究として、日本老年医学会学術集会で発表しました。高齢者の健康を、疾病や身体機能だけでなく精神・心理的、社会・環境的側面も

生活習慣病との関わり方を模索

臨床医として未熟だったためではありませんが、病棟等で患者の日常生活を思う診療は満足にできない日々が続きました。内分泌科を専門としましたが、検査や薬物治療より、予防医療に携わりたい気持ちが強くなりました。ところが、どのような道に進めばよいか分からず、労働者の健康管理を行う産業医活動を始めました。岡山県労働基準協会労働衛生センターに就職し、県の隅々まで、さまざまな規模の事業場の健診を行い、産業医も務めました。

元気に働き続けられるように、しかし生産性も落とさずに、少しでも心身の健康のために工夫できることはないか、労働者や管理者と共に考える生活に密着した現場であると感じました。

大阪府に引越すことになり、大阪大学大学院の公衆衛生学教室に所属しました。磯博康教授の率いる教室は、循環器疾患を中心とする生活習慣病の予防を目的として、保健所や医師会と協力して疫学調査を実施し、予防活動に参加しながら研究します。特に八尾市は、昭和37年から、循環器健診を中心とする予防対策を進めており、52年には住民を主体とする成人病予防会に引き継がれて活動してきました。住民や保健師等と健診の準備・運営や結果説明会を開き、地区の祭りに参加する等、顔の見える関係性を築きながら、予防活動ができることに楽しさを感じました。

その後、大阪がん循環器病予防センターに所属し、大阪府健康増進計画に係る重症化予防の市町村支援事業に参画しました。府行政の俯瞰的な視点を持って取り組むこの分野に困難さを感じつつ、糖尿病対策等のプログラムが形となり、府内で活用されたときの充実感は絶大でした。

個から集団に関わるようになり、大阪府内のデータを分析する経験をして、もう少し現場に近い立場で、地域の実情に即した予防活動に取り組みたいと思いはじめたころ、八尾市入庁のお誘いを受けました。

「中核市やお」に就職して

平成30年、八尾市の中核市移行と医師増員に伴い、保健所の高山佳洋所長と磯教授のご縁で声を掛けていただきました。これまでお付き合いのあった八尾市の一員になって仕事ができることに喜びを感じる一方、感染症や難病等、一から勉強し直さなければいけないと漠然と覚悟して飛び込みました。高山所長から、公衆衛生とは、地域社会の健康問題に対して、科学的根拠に基づいた技術と方法を産・官・学等地域社会の総合力を結集して立ち向か

う取り組みであること教示いただき、これまでの経験すべてを生かして業務に当たりたいと考えました。

1年目は、結核医療の診査に関すること、医療機関への立ち入り検査に戸惑いました。結核医療は、診査会やコホート検討会を通じて、庁内で学びながら、結核対策の経験豊富な大阪府結核解析評価検討会や大阪府保健所接触者検討会に参加させて頂くことで知識を深めることができました。立ち入り検査は、医療安全・院内感染対策について、医師の立場で点検しますが、感染防止対策加算を算定されている医療機関を点検できるような実力はなく、肝を冷やしながらラウンドしました。この不安に対しても、大阪府保健所の立ち入り検査に同行し、検査の側面ばかりを重視せず、災害時の医療の確保等、地域医療の関係づくりとしても貴重であると認識できました。

これまでの経験を生かす業務として、八尾市の健康関連データを活用していく仕組みづくりに着手し、保健センターの保健師等と小学校区ごとの健康カルテ(地域診断)や糖尿病性腎症の重症化予防事業について

協議する時間にやりがいを感じました。

そして、令和2年3月8日、八尾市でCOVID-19の感染者が初めて発生して以降は、この感染症対応が業務の中心となり、医学史で学んだ感染症の脅威を目の当たりにしました。誰もが初めて経験する事態であり、国内外の知見や国の示す法律や通知を基に対応しました。行政医師初心者にはかえって役割を見つけやすかったようにも思いますが、職員の時間外労働が超過する中、自身は育児のため、同僚や家族に負担を掛ける心理的な葛藤が伴いました。感染症担当の保健師は5名でしたが、最前線で患者の安全確認等、即時出向していく献身的な姿に改めて感服しました。すぐに担当だけで対応できる業務量を超え、保健所の全所体制や部内・庁内応援の協議を重ねて、少しずつ応援体制を強化し、保健師・看護師32名の増員で臨んでいることは、中核市保健所の素晴らしさと実感しています。

今後に向けて

令和3年4月、八尾市は、地域共

生社会の実現に向けて機構改革を行い、保健所は、高齢介護や障害福祉を担うする部と統合した健康福祉部となりました。保健センターを保健所長の所管とし、新たに健康まちづくり科学センターが設置され、科学的な裏付けの下、健康まちづくりを推進する体制が強化されました。保健所には医師が増員され、大阪がん循環器病予防センター時代に多大なるご指導を賜った北村明彦先生が着任しました。八尾市健康まちづくり宣言の通り、誰もが自分らしく生き生きと暮らせるよう、誕生してから1くなるまでの全ライフステージを通じて、健康的な生活を支援できるような組織横断的な事業展開ができたと思います。

また、COVID-19では2800人以上の感染者発生を経験しました。保健所のデータを生かして、八尾市からエビデンスを発信し、科学的根拠に基づく公衆衛生活動につなげたいです。さまざまなきっかけやご縁、支えてくださった方々により、ここまでこられたことに感謝し、今後も地域保健・医療に貢献できるように精進してまいります。